

根々井居屋敷遺跡Ⅱ

長野県佐久市根々井 根々井居屋敷遺跡Ⅱ 発掘調査報告書

2024.3

佐久市教育委員会

例 言

1. 本書は、高橋勇紀が行う事務所建築工事に伴う根々井居屋敷遺跡IIの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 高橋勇紀
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 根々井居屋敷遺跡II（N I Y II） 134m²
5. 所在地 佐久市根々井字屋敷563-1
6. 調査期間 令和4年9月14日～10月5日（現場発掘作業）
令和4年10月～令和6年3月（報告書作成作業）
7. 調査担当者 富沢一明
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
9. 陶磁器類の鑑定は（一財）長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏に依頼した。

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居址（H）・土坑（D）・溝（M）・ピット（P）である。

2. 掘図の縮尺については、掘図中にスケールを示した。

3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高
を標高」とした。

4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色
帖』に基づいた。

5. 掘図中のスクリーントーンは以下のことを
示す。



第1図 根々井居屋敷遺跡II位置図



発掘調査状況

目 次

例言・凡例・目次

第I章 発掘調査の経緯

1. 立地と経過
2. 調査体制
3. 調査日誌
4. 遺構・遺物の概要
5. 標準土層
6. 調査の方法

第II章 遺構と遺物

1. 壓穴住居址
2. 土 坑
3. 溝状遺構
4. ピット
5. 遺構外出土遺物

第III章 調査の総括

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

1. 立地と経過

根々井居屋敷遺跡Ⅱは、佐久市根々井に所在し遺跡範囲の南よりに位置する。調査地点は湯川により形成された低い台地上の縁近くに立地する。遺跡周辺の海拔は668m前後を測る。

本遺跡の周辺は、埋蔵文化財発掘調査の実績が乏しい地域であるが、今回の調査地点に近接して根々井居屋敷遺跡Ⅰ、根々井居屋敷遺跡Ⅲがある。いずれの遺跡からも弥生時代～平安時代の遺構が検出されている。また、北側の台地上縁辺には、いわゆる「流山」を利用した根々井大塚古墳が立地する。根々井大塚古墳は、流山山頂の一部を利用して作られた弥生時代末～古墳時代初頭の「墳丘墓」的な墳墓であることが判明しており、佐久地域においては希少な事例となっている。

今回、遺跡内において高橋勇紀により事務所建設工事の計画がされ、市教育委員会を通じ県教育委員会に文化財保護法93条の届出があった。市教育委員会では試掘・確認調査を行い、その結果から遺跡の保護措置がとれない建物基礎部分で記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。

なお、発掘調査に当たっては開発関係者・地権者・隣接住民の方々に多大なるご理解とご協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

2. 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	吉岡道明
事務局	社会教育部長	土屋 孝(令和4年度)	依田 誠(令和5年度)
	文化振興課長	中沢栄二	
	企画幹	井上 剛	
	文化財調査係長	山本秀典	
	文化財調査係	小林眞寿	富沢一明 上原 学 久保浩一郎 松下友樹
調査員	小林妙子	田中ひさ子 大矢志慕	堀篠保子
	筍輪由紀	渡辺 学 原 園子	堀篠まゆみ

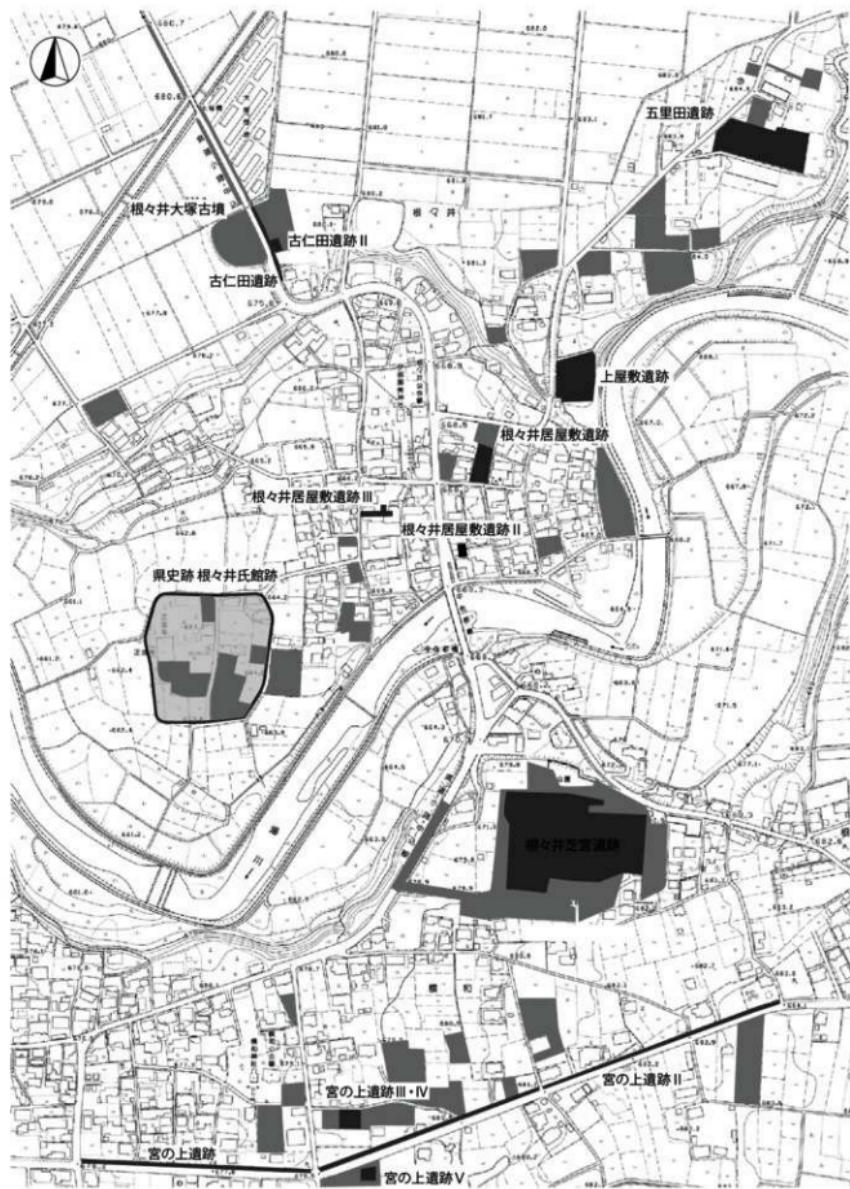
3. 調査日誌

令和4年5月23日	高橋勇紀より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
5月24日	長野県教育委員会へ市教育委員会より4佐教文振第1137-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
6月1日	長野県教育委員会より4教文第7-335号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
6月10・11日	佐久市教育委員会により試掘・確認調査の実施
6月22日	高橋勇紀より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
7月11日	佐久市教育委員会より見積回答
9月8日	高橋勇紀と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
9月14日～	記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成業務を行う。
令和6年3月	調査報告書を刊行する。記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。

4. 遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址	8軒(弥生～平安)	溝状遺構	1本	土坑	3基
遺物	弥生土器(箱清水式土器)	土師器	須恵器	灰釉陶器	陶磁器類	

土製品(紡錘車) 石製品



第2図 周辺遺跡位置図

5. 標準土層

今回の調査地点は西方向に僅かに傾斜する沖積微高地上で、基本層序は4層に分かれます。

第Ⅰ層 (10YR4/1) 暗灰色土

(耕作土)

第Ⅱ層 (10YR2/1) 黒色土

第Ⅲ層 (10YR5/6) 黄褐色土
(シルト層)

第Ⅳ層 (10YR7/1) 灰白色土
(砂層)

遺構確認面はⅢ層上面である。今回の調査地点では、Ⅲ層の黄色シルト層は西に向かって傾斜しており、調査区南側ではⅢ層は確認できず、Ⅳ層の砂層が遺構確認面となった。

また、M1号溝状遺構の底面ではⅣ層の砂層中に拳大から人頭大の川原礫が入った状態で確認され、場所により地山が異なる沖積地特有の状況を示していた。

6. 調査の方法

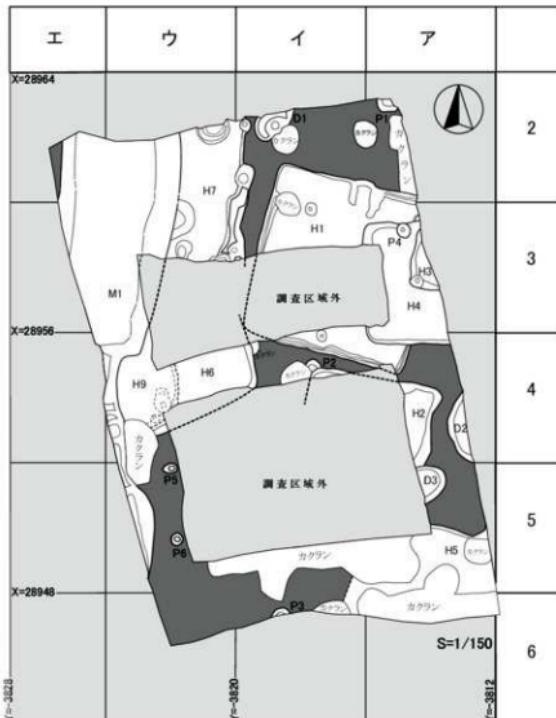
遺構調査・遺構測量

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNo.を付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。平面図・断面図とともに調査区内に設定した基準杭を利用した遺り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手でおこない、室内乾燥させた。注記は白色のポスター色により行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充當材はエボキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。遺構図面は1/20で測量実測した図を1/40で修正し、遺物は1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。



第3図 調査全体図(1:150)

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼カメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

第II章 遺構と遺物

1. 穴住居址

(1) H 1 号住居址

本址は調査地中央で検出された。残存状態は住居址中央部が調査区域外となり、東側がH3・4号住居跡に削平されている。形態は方形と考えられ、カマドは北壁で検出された。規模は南北長5.02m、東西長5.00mを測る。壁高さは南東コーナー付近で0.20mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-14° - Eを測る。床面積は推定で24.88m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.02~0.12mを測る。壁構は部分的に検出され、規模は幅0.18~0.28m、深さ0.03~0.21mを測る。住居掘り方は北西コーナーに長方形の掘り込みが確認された。規模は長軸1.90m・短軸1.05m・深さ0.11mを測る。ピットは5ヶ所検出された。P1とP3とP4は主柱穴と考えられる。規模はP1が径0.66m・深さ0.53m、P2が径0.82m・深さ0.59m、P3が径0.42m・深さ0.50m、P4が径0.35m・深さ0.39m、P5が径0.36m・深さ0.23mを測る。

カマドは礫と粘土で構築され、袖部は一部原形を保っていた。カマド前面で検出された大型の川原石は焚口部天井石と考えられる。火床部は顕著に焼けており、焼土の厚みは0.08mを測る。また、川原石の支脚石が原位置を保って立っており、支脚石上には図示した2の土師器壺が伏せて置かれていた。

出土遺物はカマド周辺を中心に覆土内より出土した。1と2は土師器壺である。1は内面に暗文が確認できる。3は土師器鉢である。内外面ともに丁寧なミガキを施す。4~6は土師器甕である。7は土師器壺でしたが、小片であり詳細は不明である。8は磨り石で、磨り面が1面確認できる。9~11は本址の所産時期とは異なる混入品であるが希少資料により掲載した。9は単孔の小型甕の口縁部破片と考えられる。10はいわゆる瓢壺か小型高杯壺部と考えられる。ヘラ描沈線文が施されている。11はいわゆるS字甕の口縁部破片である。ハケ目が施されている。

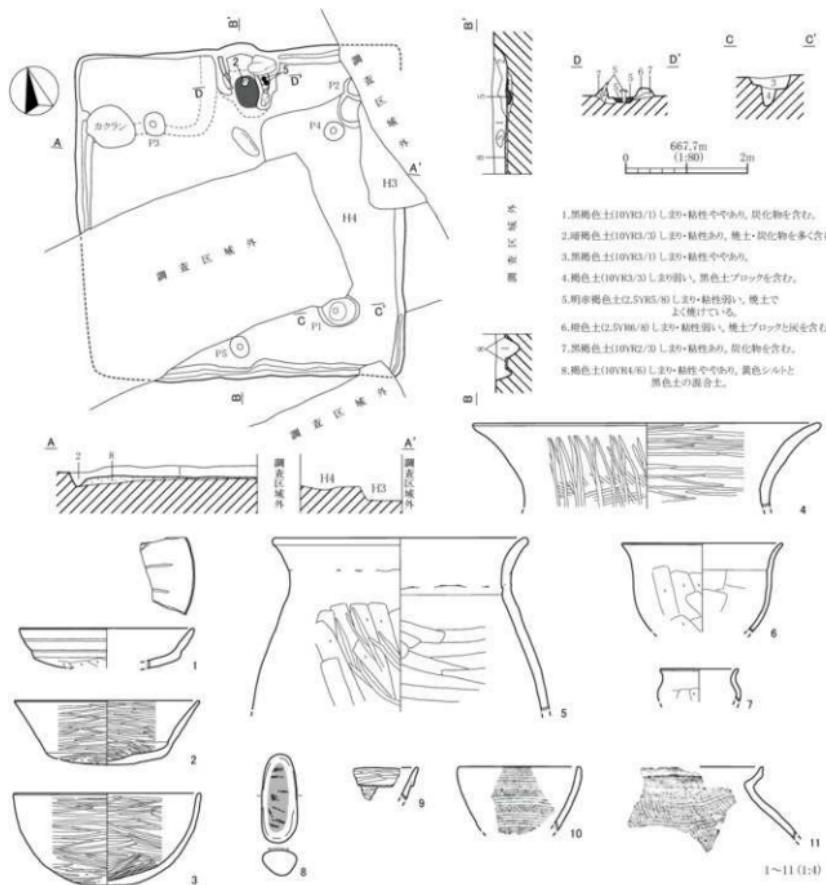
本址はこれらの出土遺物から6世紀代に比定されると考えられる。

(2) H 2 号住居址

本址は調査地中央や南よりで検出された。残存状態は住居址南側が調査区域外となり、カマドの一部と北東と北西の住居址コーナー部分の検出に止まった。形態は方形と考えられ、カマドは北壁に構築されていると考えられる。規模は南北の検出長2.12m、東西長3.74mを測る。壁高さは北西コーナー付近で0.33mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-11° - Eを測る。床面積は検出部分で1.30m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.06~0.09mを測る。住居掘り方はほぼ平坦であった。カマドは右袖部分が検出された。粘土で構築されていたと考えられ、一部原形を保っていた。

本址からの出土遺物は少なかったが5点を図示した。1は土師器壺である。2は土師器甕である。頸部の屈曲が強い。3は土師器甕で、ほぼ完形である。孔は多孔タイプで焼成前の穿孔である。カマドの粘土内より出土した。4は磨石と考えられる。球形の川原石で、全面よく研磨されている。使用方法は不明である。5は縄文土器深鉢の破片で混入品である。

本址は出土遺物が少なく、所産時期は不確実な部分が大きいが、土師器甕や土師器壺などから6世紀代に比定されると考えられる。

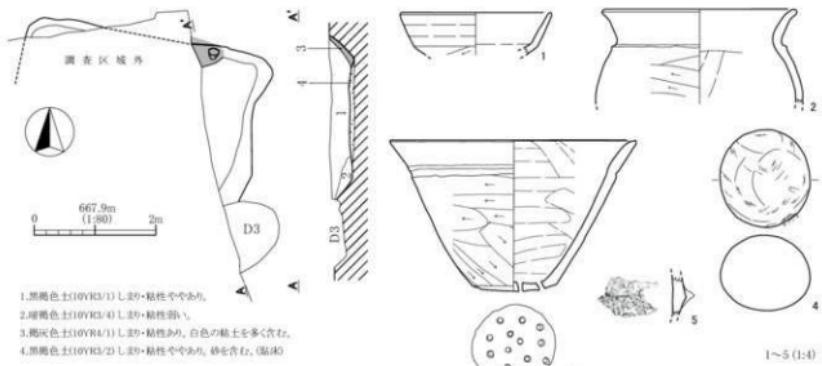


第4図 H1号住居址及び出土遺物実測図

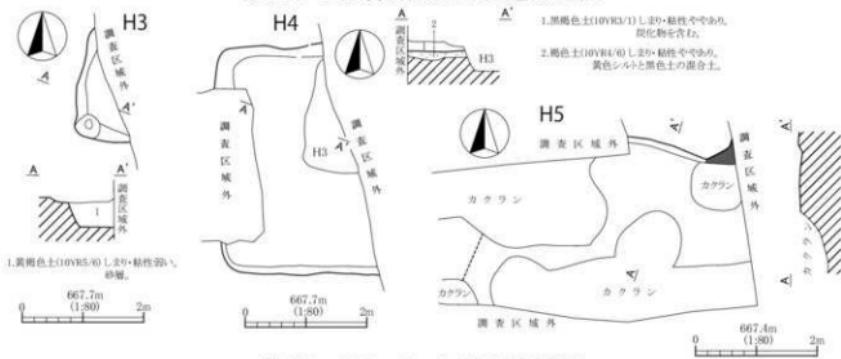
(3) H3号住居址

本址は調査地中央東よりで検出された。残存状態は住居址東側が調査区域外となり、住居南西コーナー部のみの検出に止まった。形態は不明である。規模は南北の検出長0.90m、東西の検出長0.46mを測る。壁高さは南西コーナー付近で0.48mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は南北壁を基にN-10°-Eを測る。床面積は検出部分で0.44m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であり、貼床は検出されなかった。住居掘り方はほぼ平坦であった。住居址南西コーナー部にピットが1ヶ所検出され、規模は径0.52m・深さ0.32mを測る。

本址からの出土遺物はなく、所産時期も不明である。



第5図 H 2号住居址及び出土遺物実測図



第6図 H 3・4・5号住居址実測図

(4) H 4号住居址

本址は調査地中央東よりで検出された。残存状態は住居址東側が調査区域外となり、住居南半分ほどが検出された。形態は方形と考えられる。規模は南北長3.44m、東西の検出長2.02mを測る。壁高さは北西コーナー付近で0.09mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は南北壁を基にN-2°-Wを測る。床面積は検出部分で4.82m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であり、貼床は0.10~0.15mの厚みで貼られていた。

本址からの出土遺物はなく、所産時期も不明である。

(5) H 5号住居址

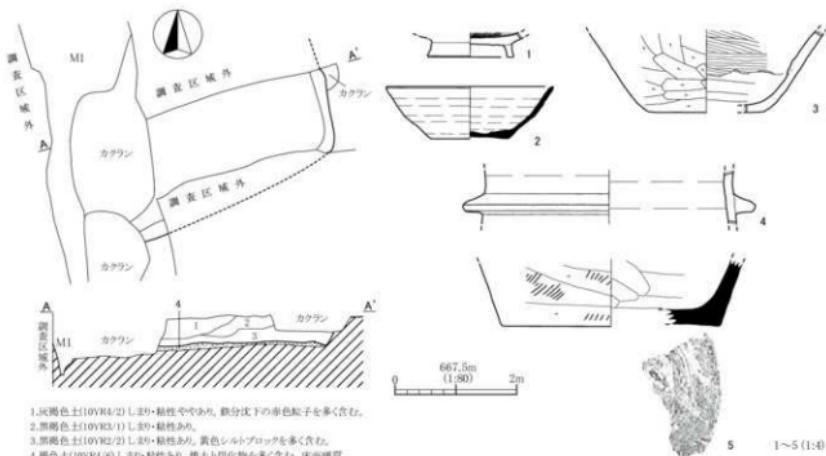
本址は調査地南東よりで検出された。残存状態は住居址東側と南側が調査区域外となり、また後世の削平を受けており、カマドと考えられる部分の一部と僅かな床の範囲を確認したに止まった。形態は方形と考えられる。規模は検出された南北長2.96m、東西の検出長4.44mを測る。壁高さは北側で0.11mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面積は検出部分で2.88m²を測る。

本址からの出土遺物は少なく、土師器甕のいわゆる「武藏甕」の破片や土師器壺の破片、古墳時代の甕胸部破片、弥生時代後期の壺破片4点があつたがいずれも小片で図示できるものはなかった。

よって、本址の帰属時期は不明である。

(6) H 6 号住居址

本址は調査地中央やや西よりで検出された。残存状態は住居址の南北が調査区域外となり、住居址の南側一部が検出されたに止まった。形態は方形と考えられる。規模は南北の検出長1.28m、東西の検出長3.60mを測る。壁高さは南東コーナー付近で0.50mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は南北壁を基にするとN-24°-Wを測る。床面積は検出部分で3.37m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.02~0.05mを測る。住居掘り方はほぼ平坦であった。



第7図 H 6 号住居址及び出土遺物実測図

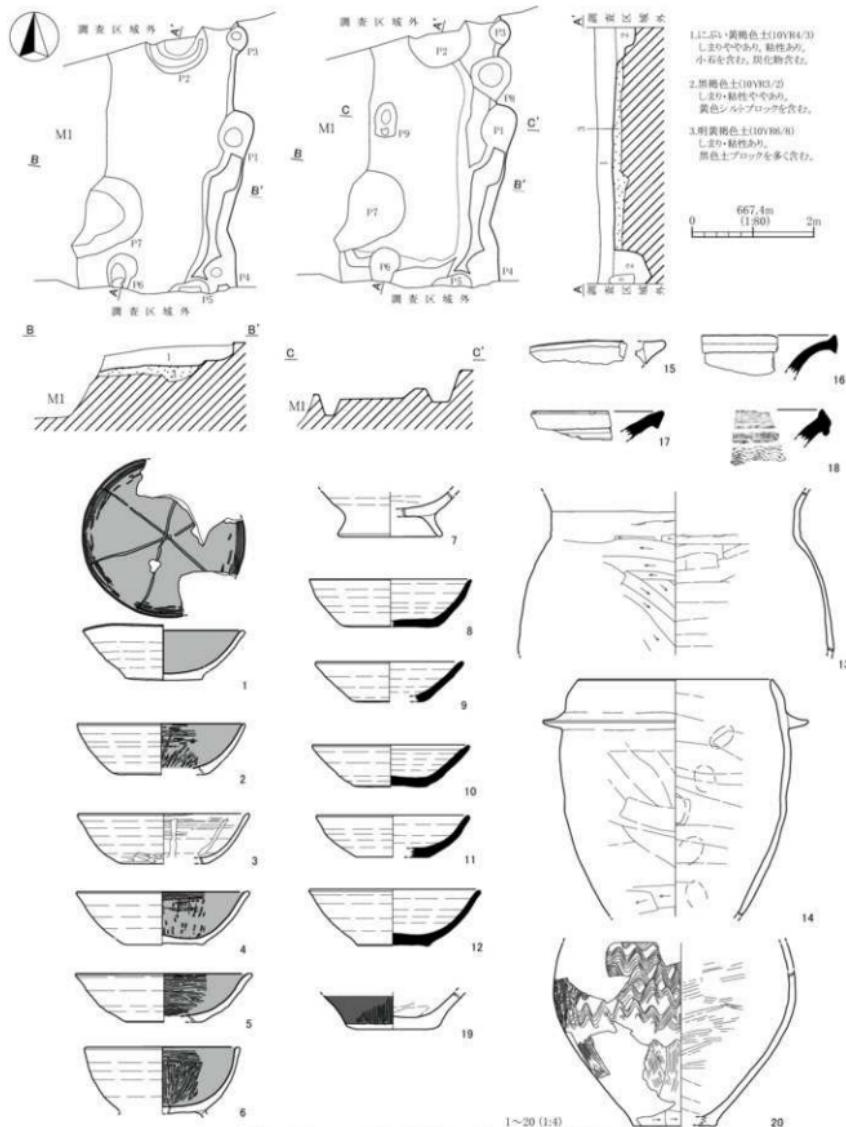
本址からの出土遺物は少なかつたが5点を図示した。1は土師器甕の高台部分である。壺内面は黒色処理されている。2は須恵器壺である。3は土師器甕である。4は羽釜の鋸の部分であり、良好な焼成である。5は須恵器甕の底部破片である。胸部外面は敲き痕が残る。

本址は出土遺物が少なく、所産時期は不確実な部分が大きいが、須恵器壺や須恵器甕から奈良～平安時代の所産と考えられる。

(7) H 7 号住居址

本址は調査地北よりで検出された。残存状態は住居址の南北が調査区域外となり、西側がM 1号溝状構造に削平されている。形態は不明である。本址はカマド等は確認されず、堅穴状構造の可能性もあるが、しっかりとした床面が確認できることや、出土遺物が古代に比定できることから今回は堅穴住居として報告する。

規模は南北の検出長4.45m、東西の検出長が1.95mを測る。壁高さは0.24~0.37mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は東壁を基にするとN-11°-Eを測る。床面積は検出部分で7.91m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.12~0.25mを測る。壁溝は検出さ



第8図 H7号住居址及び出土遺物実測図

れなかったが、東壁の一部でテラス状の段が確認できた。住居掘り方は中央部が一段低くなる掘り込みが確認された。ピットは9ヶ所検出された。規模はP1が径0.71m・深さ0.21m、P2が径1.00m・深さ0.31m、P3が径0.39m・深さ0.17m、P4が径0.53m・深さ0.14m、P5が径0.66m・深さ0.13m、P6が径0.55m・深さ0.45m、P7が径1.40m・深さ0.27m、P8が径0.71m・深さ0.27m、P9が径0.56m・深さ0.36mを測る。

本址からの出土遺物は、覆土を中心に多く出土した。20点を図示した。1～5は土師器壺である。内面黒色処理されているものや、暗文を施すものがある。6と7は土師器碗である。8は高台部を欠損する。8～12は須恵器壺である。底部は回転糸切り離しであるが、8のみ切り離しの後へラ削りを行っている。13は土師器壺の胴部破片である。口縁部と底部が欠損しているが、いわゆる「武藏甕」と呼ばれるタイプの甕である。14は羽釜である。底部を欠損する。15は羽釜の鋒の部分である。16～18は須恵器甕の口縁部破片である。18のみ櫛描波状文が施されている。19と20は混入遺物で、いずれも弥生時代後期の所産のものである。19は壺底部の破片で、外面が赤彩が施されている。20は甕であり、胴部に櫛描波状文が施されている。

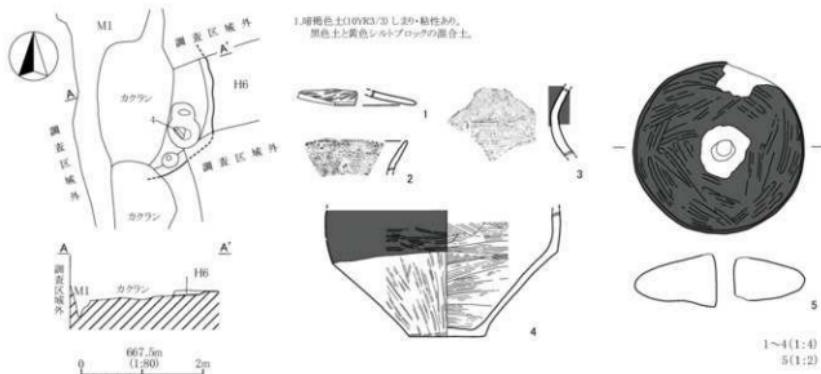
本址の所産時期はこれらの出土遺物から9世紀代と考えられる。

(8) H 9号住居址

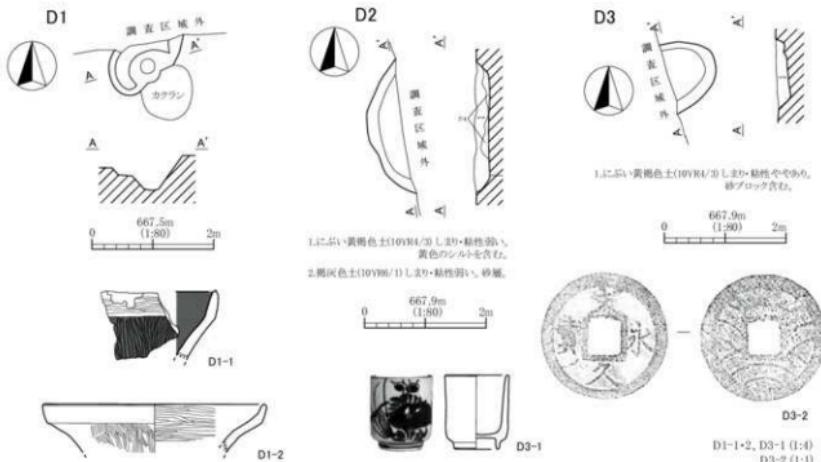
本址は調査地中央西よりで検出された。残存状態は住居址上部がH 6号住居址に、西側がカクランとM 1号溝状遺構により削平されている。住居址は南東コーナー部のみの検出に止まった。形態は不明である。規模は南北の検出長1.28m、東西の検出長1.14mを測る。壁高さは南東コーナー付近で0.17mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。床面積は検出部分で0.87m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であった。

本址からの出土遺物は少なかつたが、5点を図示した。1は高壺の脚部破片である。外面に丁寧なミガキが施されている。2は甕の口縁部破片で、口唇部に刻みがあり、口縁部には櫛描波状文が施されている。3と4は壺である。3は頸部の部分で、赤彩と櫛描簾状文が施されている。4は胴部下半から底部である。外面は丁寧なミガキと赤彩が施されている。5は土製紡錘車で、全面に丁寧なミガキと赤彩が施されている。

本址の所産時期はこれらの出土遺物から弥生後期の箱清水期と考えられる。



第9図 H 9号住居址及び出土遺物実測図



第10図 D 1～3号土坑及び出土遺物実測図

2. 土坑

(1) D 1号土坑

本址は調査地北端で検出された。形態は不整形で、北側が調査区域外となるため全容は不明である。規模は検出された長軸長1.42m・検出された短軸長0.61m・深さ0.56mを測る。覆土は自然堆積であった。本址からの出土遺物は2点を図示した。1と2は共に壺の口縁部破片である。いずれも口唇部が垂直に立ち上がり、1は赤彩が施されている。

本址はこれらの出土遺物から、不確実であるが弥生後期箱清水期の所産と考えられる。

(2) D 2号土坑

本址は調査地南東よりで検出された。東側が調査区域外となり全容は不明である。形態は楕円形か。規模は検出長軸長2.23m・検出短軸長0.56m・深さ0.20mを測る。本址からの出土遺物は弥生後期の甕破片が1片出土したのみである。よって、本址の所産時期は不明である。

(3) D 3号土坑

本址は調査地南東よりで検出された。形態は不整形で、西側が調査区域外となるため全容は不明である。規模は検出された長軸長1.15m・検出された短軸長0.79m・深さ0.15mを測る。覆土は自然堆積であった。本址からの出土遺物は2点を図示した。1は近世陶磁器の湯呑である。2は「文久永寶」1863年(文久3年)であり、背に波紋が11波ある。

本址はこれらの出土遺物から、近世の所産と考えられる。

3. 溝状遺構

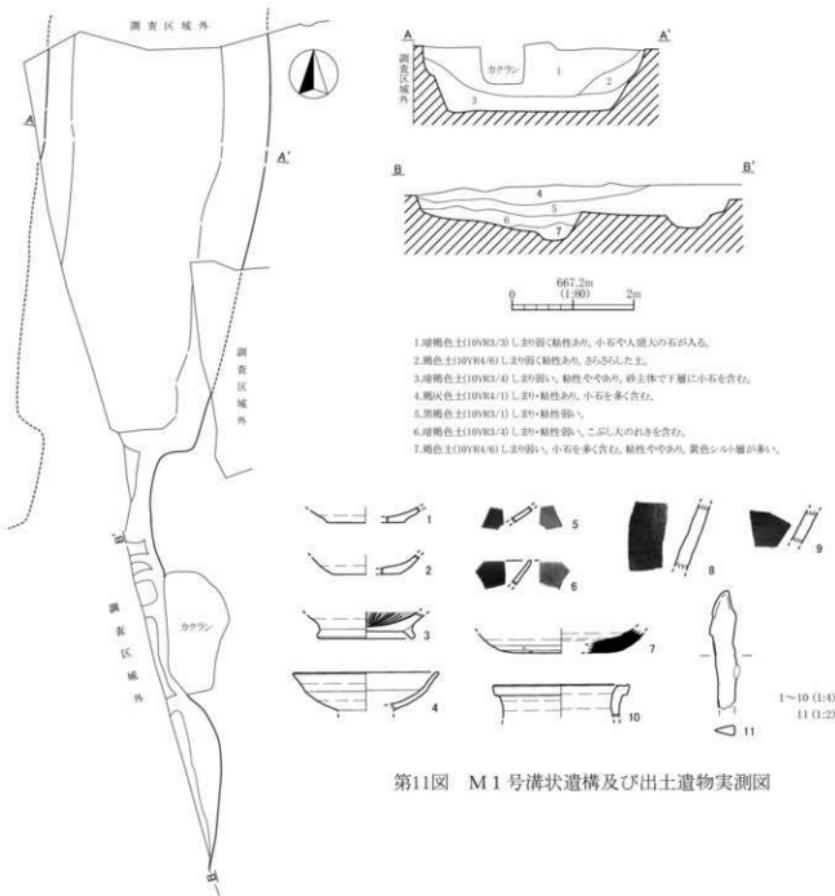
(1) M 1号溝状遺構

本址は調査地西端で検出された。南北方向に延びる溝状遺構で、検出された長さは13.60mを測る。規模は幅が検出できた北側で3.63m、深さ0.44～1.12mを測る。形態は断面が逆台形で、溝底面は平坦であった。

なお、本址は検出された中間部分で溝幅が狭くなり、尚且つ底が浅くなる部分が確認でき、或いは土橋的な構造を持つ溝とも考えられる。

本址から出土遺物は11点を図示した。1と2は土師器坏である。形状より11世紀代と考えられる。3は土師器碗で、内面黒色処理されている。4と5は白磁で、4は皿でV類12世紀代、6は青磁碗片で内面に画花文が施され12世紀後半に比定される。7は須恵器壺か。8は東濃系の壺破片である。9は灰釉陶器、10は産地不明の壺であるが形状より12世紀代の所産か。11は鉄製品で、鐵鎌の先端とも考えられる。

本址はこれらの出土遺物から12世紀代に埋没したと考えられる。



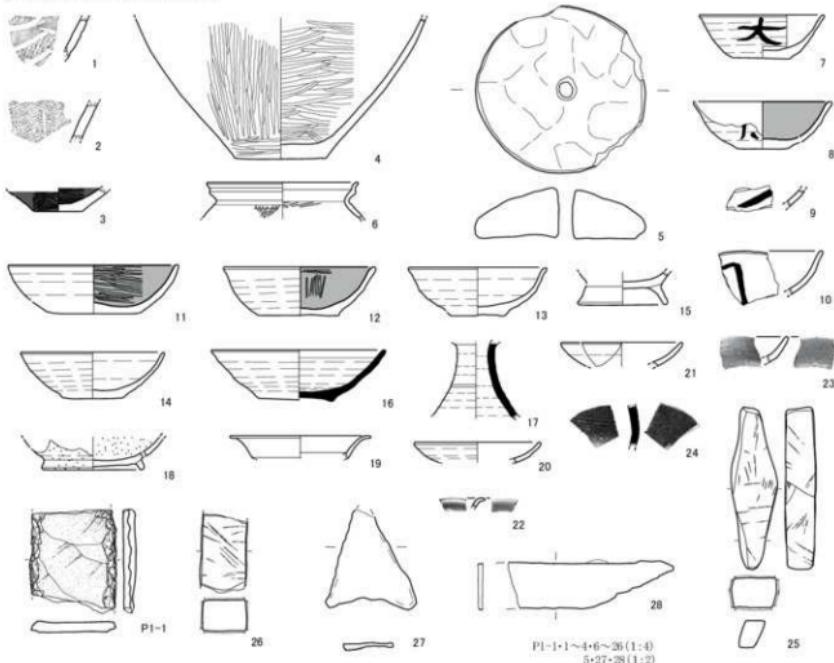
第11図 M 1 号溝状遺構及び出土遺物実測図

4. ピット

今回の調査では6カ所の単独ピットを調査した。ただ、調査区が限られた範囲であるため、掘立柱建物址の一部やそれに関係するであろうピットは把握できなかった。下図にP1より出土した打製石斧を図示した。

第1表 ピット計測表

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 性	単位m () 推定 () 現存	
						須恵器壺I	須恵器壺II
P1	ア-2	(0.48)	(0.37)	0.17	-	-	
P2	イ-4	(0.41)	(0.42)	0.20	-	-	H2より古
P3	イ-6	(0.60)	(0.20)	0.34	-	-	
P4	ア-3	0.50	0.30	0.18	-	-	H4より新
P5	ウ-5	0.36	0.32	0.44	円形	-	
P6	ウ-5	0.40	0.36	0.59	椭円形	-	



第12図 ピット及び遺構外出土遺物実測図

5. 遺構外出土遺物

今回の調査では縄文時代から近世に及ぶ幅広い時間帯の遺物が出土した。本節では遺構に伴わない遺物を図示した。1と2は縄文深鉢の胴部破片である。1は沈線間に縄文を充填している。2は無節縄文か。3は弥生後期の鉢底部破片である。内外面丁寧なミガキが施され、赤彩されている。4は弥生後期の壺か大型の鉢と考えられる。内外面丁寧なミガキが施されている。6はいわゆる「S字甕」と呼ばれる台付甕の口縁部である。外面に縦と横方向の櫛目が施され、内面にも頸部に櫛目がある。5は土製鋸鍼車で、ほぼ完形である。7～14は土師器壺である。7～10は外面に墨書きあるいは墨痕が確認できる。7は「大」と判読できる。8と11・12は内面黒色処理されている。15は土師器碗である。底部から高台部が残存している。16は須恵器壺である。17は須恵器高壺の脚部で、脚部中ほどに弱い沈線が巡っている。18は灰釉陶器碗である。高台部から底部が残存している。19は、12世紀後半代の白磁皿、20と21はいずれも近世の灯明皿である。22は近世の碗、23は16世紀末から17世紀代の志野丸

碗の口縁部である。24は須恵器片である。25と26は砥石である。25は使い込まれており、4面の砥面が確認できた。27と28は鉄製品である。いずれも用途不明である。

第III章 調査の総括

今回の調査地は134m²という狭い範囲であったが、大きな二つの調査成果が挙げられる。本章ではその事に触れ調査の総括としたい。

まず第1点目としては、根々井居屋敷遺跡内で初めての弥生時代住居址を発見したことである。北に近接する根々井居屋敷遺跡では弥生時代の環濠と考えられる溝址が確認されていたが、今回の住居址の発見により、根々井の湯川段丘面に環濠集落が立地している可能性が非常に高まった事になる。尚且つ、出土土器の中には地元の弥生後期箱清水式土器とともに東海地方に系譜をもつ「S字甕」や、佐久地域では希少な出土例となる「瓢壺」或いは「小型高壺」といった土器片が加わっている。このことは、近接して北の台地上に立地する根々井大塚古墳から出土する東海系土器とも関連が指摘でき、本遺跡が佐久地域の古墳時代幕開けの重要な場所の可能性が出てきた事となる。

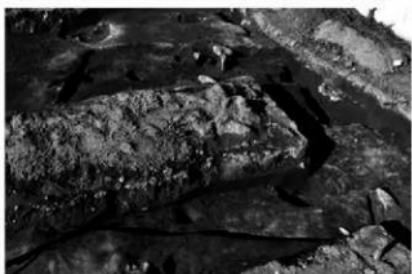
第2点目は、調査区西端より検出されたM1号溝状遺構である。本址は、南北方向に延びる幅3.6m・深さ1m以上の溝である。また、調査区の関係で全容の把握はできなかつたが、溝の一部に幅と深さが異なるいわゆる「土橋」状の部分があることが推測できた。この形態から、本址の性格は館等の区画溝で、入口等の部分にあたる可能性が高いことが指摘できる。出土遺物が少ないため溝の使用期間は不確実であるが、白磁・青磁や陶器類等の資料から使用時期か或いは埋没が12世紀代と考えられる。

この年代観が正しければ、本遺跡の西に存在する県史跡「根々井氏館跡」との関連が大きな問題となってくる。根々井氏の活躍は「木曾義仲の旗揚げ」にも語られているごとく12世紀末であるが、その時期と本遺構は重なってくることとなる。現在までに県指定史跡である「根々井氏館址」の範囲では、数次の発掘調査が行われているが12世紀代に比定しうる遺構の発見がない。しかし、近接して12世紀代の溝状遺構が発見されたことは、現在の指定地根拠の補強となるのか、新たな館跡の存在を示すものなのか、今回の調査範囲では結論が出しにくいが、今後注目すべきエリアであることは確かなことである。

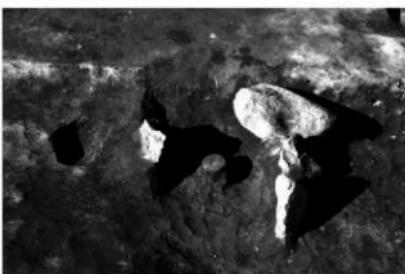
以上、雑駁ではあるが今回の総括としたい。



調査区全景(南より)



H1号住居址



H1号住居址カマド

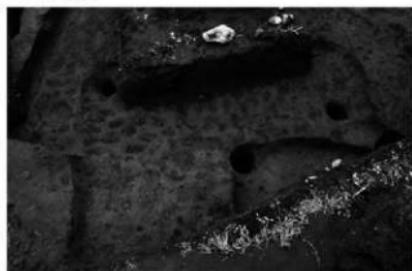
図版 1



H 2号住居址



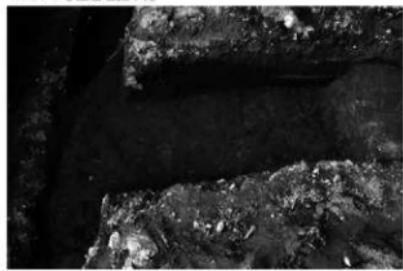
H 2号住居址出土遺物



H 3、4号住居址掘り方



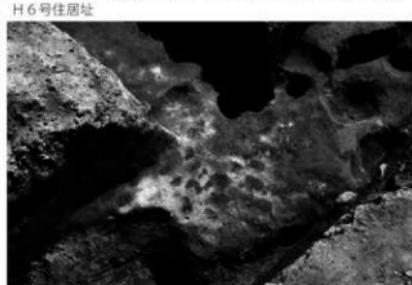
H 5号住居址掘り方



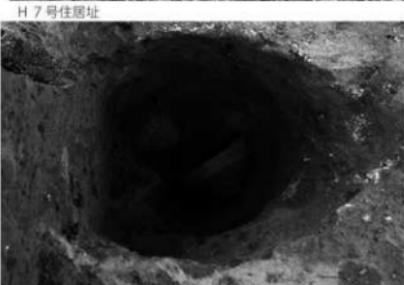
H 6号住居址



H 7号住居址

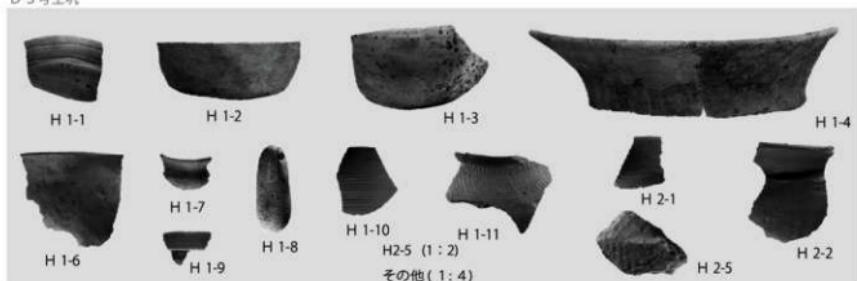
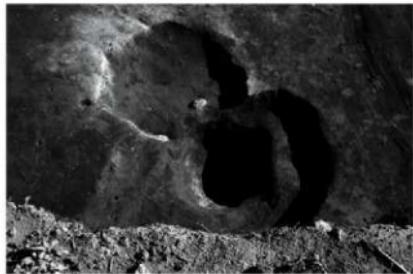


H 9号住居址

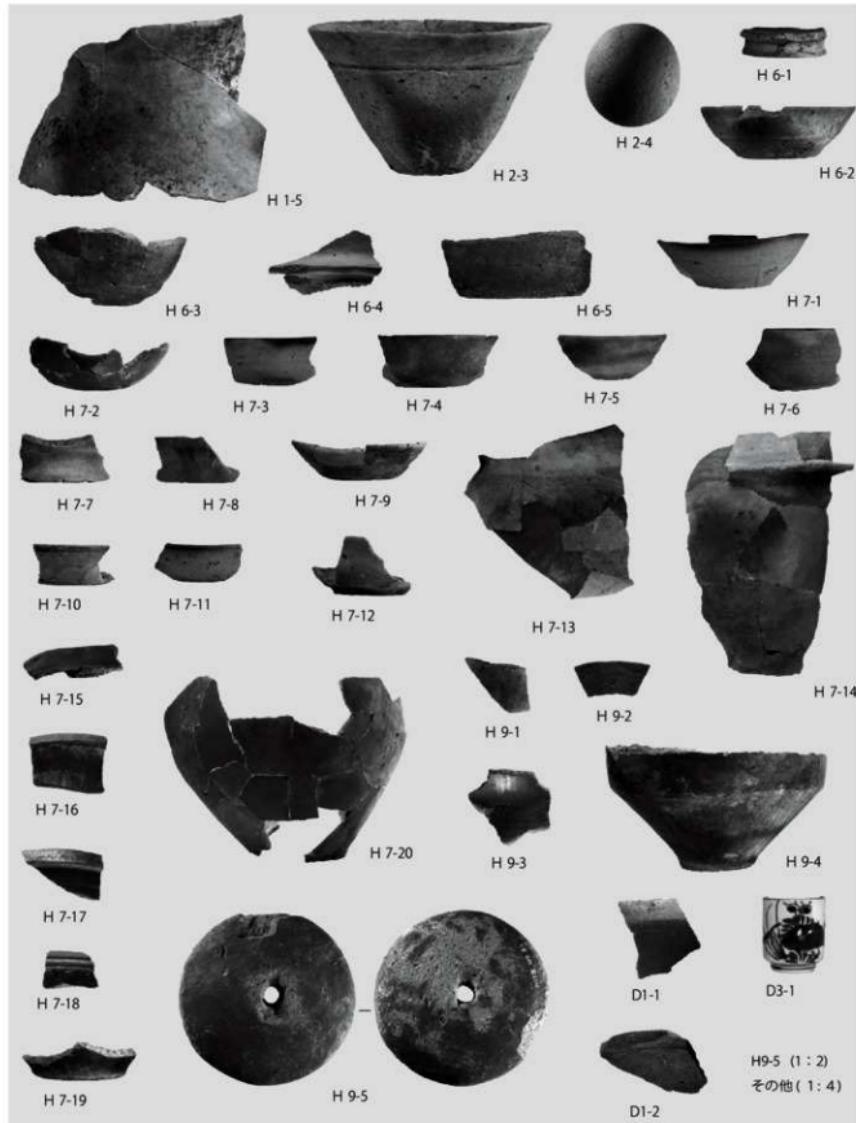


H 9号住居址出土遺物

図版2



図版3



図版4



報告書抄録

ふりがな	ねねいいやしきいせきに							
書名	根々井居屋敷遺跡II							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第300集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2024年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
ねねいいやしき いせきに 根々井居屋敷遺跡II	さくしへねい 佐久市根々井 563-1	市町村	遺跡番号			20220914 ～ 20221005	134	事務所 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
根々井居屋敷遺跡II	集落跡	弥生 古墳 平安	堅穴住居址 8軒 溝状遺構 1本 土坑 3基	弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 土製品				
要約	湯川を望む沖積微高地上を発掘調査した。その結果、周辺部の調査事例を補強する古墳時代と平安時代と考えられる堅穴住居群が検出された。特に今回、根々井居屋敷遺跡内で初となる弥生時代後期の堅穴住居が検出された。また、12世紀代の「土橋」状の形態をもつ溝状遺構も発見された。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第300集

根々井居屋敷遺跡II

2024年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所 キクハラインク有限会社